

暦で読み解く古代天皇の謎

大平裕著 (PHP文庫・780円+税)



私どもは歴史という時間軸の中を生きている。私の生年は昭和14年だが、この年はどういう歴史を紡ぎ上げて成った年なのだろうか。昭和の前に大正がありその前に明治があったと、時代をどんどん遡っていくと一体どこに行き着くのだろうか。天皇は現憲法では「日本国の象徴であり日本国民統合の象徴」であるが、しかし、それより前に日本の連綿としてつづく「歴史の象徴」として人々に長く意

識されてきたのに違いない。

とすると、天皇の治世によって区分される時代はどこまでその淵源をたどればいいのか。このことは歴史研究者は

もとより市井の人間にとっても大いなる関心事でなければならぬ。なぜならそれが日本人としてのアイデンティティの淵源の、少なくとも重要な一部だからである。しかし、まことに不愉快にも、津田左右吉氏の学説を權威として崇める日本の古代史家は、『古事記』を文学書、『日本書紀』を天皇の統治を正当化

するための「造作」の書だとし、古代史を古墳時代といったまるで生気の失せた用語法で一括りにしてしまった。この時代を生きた多くの天皇たちの存在とその治世のありようを今に甦らせようという関心は絶えたままなのである。著者の5冊目となる古代史シリーズの本書は、暦という歴史の時間軸を捨てる場合の不可欠の観念が、日本でどのようにして始まったのかを探ろうという野心作である。

南朝の宋の元嘉暦により紀年ははっきりしているが、それ以前の20代天皇の在位年数については不明であり、そのために『日本書紀』の編纂者たちは天皇の在位年数を延長ないし想像せざるをえなかったという。そこで筆者は神功皇后以降について本来の紀年の復元を試みたのだが、これに成功したことが特筆されるべきである。また『日本書紀』神武天皇紀にある神代から人代への移り変わりが179万年かかったという数字は、儀鳳暦という1340×1340であることを発見しており、この発見こそが本書出版の画期的意義なのである。

日本書紀の暦年計算法発見

評・渡辺利夫

(拓殖大総長)